

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第208次)

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、近年、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的にこなっています。前号でお伝えしたように、大極殿院は大極殿の後方を画する大極殿後方東回廊・西回廊によって南北二つの空間に分割されます。このうち北側の空間には、前期難波宮内裏後殿に相当する建物が存在した可能性が指摘されており、今年度はこの建物の有無を改めて検討することを主目的として、大極殿の北方を広く調査しました。

調査の結果、大極殿後方回廊から大極殿院北面回廊までの範囲では、基壇や礎石据付痕跡といった明確な建物の痕跡はみつきませんでした。また、藤原宮の造営時には基壇の周囲に排水溝をめぐるせることが通例となっていますが、同範囲ではこうした排水溝もみつきませんでした。さらに、遺存状態は良くないものの、礫を敷いて空間を整備していることを確認しました。こうした状況から、回廊に囲まれた空間には前期難波宮内裏後殿に相当する建物はなく、その造営にも着手していない可能性が高まりました。建物を配置する計画はあったものの、最終的に着手にいたらなかったことも考えられますが、この空白地の性格については現在も検討を深めているところです。



調査区全景(北西から、香具山を望む)

いっぽうで、調査区の東南部と西南部のそれぞれにおいて、大極殿後方東回廊・西回廊よりも北に張り出す基壇の積み土と、それを取りまく基壇造成時の排水溝を検出しました。特に西南部では基壇土の遺存状態が良く、版築状に土が積まれた状況を確認しました。このことから、両回廊の間に、回廊よりも梁行の広い基壇建物があった可能性が浮上しました。ただし、今回検出した範囲では、明確な礎石の据付痕跡や抜取痕跡は確認できておらず、今後の調査で建物の有無を改めて検討する必要があります。

以上に記したように、今回の調査では、大極殿院を構成する空間のうち北側については最終的に空白地であった可能性、そして大極殿後方回廊の中央に回廊よりも梁行の広い基壇建物があった可能性を提示しました。いずれも、藤原宮を含む古代都城の造営過程や構造、変遷を考える上で重要な成果と考えられます。

また、前号でお伝えしたように、今回の調査区の多くが1977年度に実施した藤原宮第20次調査の範囲と重複しています。第20次調査は、奈文研による大極殿院の最初の調査であると同時に、藤原宮の造営開始が天武朝末年頃に遡りうることを示唆した、学史上重要な調査として知られます。この調査で検出した遺構面に触れ、再精査できたことも、今回の調査の醍醐味の一つとなりました。

10月2日には現地見学会を開催し、600名を超える方々に調査成果をご覧いただきました。コロナ禍の中お越しくださり、ありがとうございました。現在は埋戻しを終え、本調査の整理作業を進めつつあります。今回の調査からもあきらかなように、藤原宮には解明すべき課題が多く残されています。そうした課題に取り組むべく、今後も調査を続けていきますので、どうぞご期待ください。

(都城発掘調査部 岩永 玲)



版築状の基壇の積み土(調査区西南部、東から)